

「令和4年度 第3回阿見町総合計画審議会」議事概要

審議会等の名称	令和4年度第3回阿見町総合計画審議会
開催日時	令和4年11月24日（木）午後2時30分から午後4時25分
開催場所	阿見町役場 4階 全員協議会室
議題	1. 町民参加及び職員参加の結果報告について 2. 基本構想の策定について
公開・非公開の別	公開 *傍聴者0人
議事結果	<p>【出席者】 (委員) 平岡 博 委員、川畑 秀慈 委員、蓮井 誠一郎 委員、伊丹 一浩 委員、岩井 浩一 委員、湯原 敦子 委員、山口 道子 委員、國生 輝枝 委員、江田 麻裕子 委員、野呂 薫 委員、湯原 敏子 委員、渡邊 君江 委員、木村 美由紀 委員、戸澤 麻理 委員、本間 保 委員、齋藤 十郎 委員、藤田 加奈子 委員、吉田 幸二 委員、吉田 典子 委員</p> <p>(町) 佐藤町長公室長 政策企画課：糸賀課長、飯野係長、山口主任、高村主任</p> <p>【会議の概要】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事務局より町民参加及び職員参加の結果報告が行われた。 ・ 事務局より総合計画の基本構想の策定に関する説明が行われ、その後、質疑応答が行われた。
	<p>基本構想の策定について【質疑応答（抜粋）】</p> <p>会長：第6次の時は1章から4章だったが、今7つになっている。7で多いのかなという気がするが、7というのはなかなかいい数字なのでは、とも思う。</p> <p>委員：流れの確認をしたい。資料がどんどん継ぎ足されて作られているが、審議会の役割は、それを妥当か妥当じゃないか、ということを判断するのが目標でよいのか。また、先程のたたき台は、アンケートをとって、これからどんな流れになるのか。</p> <p>会長：第6次総合計画の場合だと、キーワードとして「人と自然が織りなす輝くまち」というのが最初にあり、それに相当するキャッチフレーズのようなものを出そうとしていた。今回の場合はSDGsがあるので、誰もが幸せにということと、誰も取り残さないまちづくりをやっていくという考え方方が表現でき正在して、よろしいのか</p>

など、個人的には思っている。

委 員：10年後のまちの姿とか、基本理念とか基本目標があるが、これは第4回審議会に、出来上がったものが来るということか。

会 長：この後、事務局で整理して、それが提案されますので、委員として追加したり削除したりして良いものにしていくという事を、しっかり確認して頂ければ任務が果たせると思っている。

委 員：今の質問と似た質問かもしれないが、この審議会は、資料4ステップ4の阿見町第7次総合計画に向けての、「基本理念」、「将来像」、「基本目標」のところですね。今日の場合だと、「将来像」、「基本理念」、「基本目標」というのは、議会上程する前に町長が意見集約する時に、これをたたき台に作るという風に考えればよろしいか。どの時期のどれにどれがリンクするのか教えていただきたい。

事務局：資料2の方で、決定までのプロセスを説明しておりますので、こちらをもう一度ご覧頂きたいと思います。本日が第3回審議会となり、第1回第2回を経て、基本構想についての審議会としてのご意見をまとめて頂いている。その間の動きとして、資料1でご説明した、職員対話であるとか、町長と学生が語る会を開催してきた。そういうご意見も踏まえて、これから説明します資料6に、その結果を反映したものをまとめています。改めて皆様のご意見が反映されているかどうかを資料6で確認して頂きます。決定については、第4回審議会で答申を頂くことになります。答申は、審議会として町民目線、専門家の目線として、阿見町の第7次総合計画に必要なのはこういったものだというものを、文章で頂くようになります。その答申を踏まえ、行政のトップとしての町長の考え方、政策公約などをさらにこの基本構想の中に加え、最終的な完成版という形にしていきます。2月上旬に策定協議会を開催し、皆様のご意見に加えて、行政としての視点も盛り込んだ基本構想を完成させて、議会に提出するという流れを考えております。

委 員：基本目標について第6次の方が4つで少ないが、第7次の方が、具体的な目標が書かれていて、明確化に分野が分けてあり、どの方向性かというのが一つ一つ分かりやすいと思う。

委 員：構成として見たときに、SDGsの分野で、要は経済・環境・社会というのがそれぞれ、経済優先とか、社会優先とか、逆に環境優先とか、そういう優先順位というのは付かない、というのがSDGsの考え方です。むしろ、資料5の真ん中の上の方で、この円で示されているように、これら3つを、どういう風に、できるだけ公平にマネジメントしていくかというのが、行政あるいは政治の役割に位置づけられていると思う。最終的にはこれらの中で、それぞ

れのゴールで描かれているような事柄が、具体的にどこにつながっていくのかという事を考えながら、阿見町の実態に合わせて、政策としてデザインしていければいいのかなと考えている。あまり象徴主義的になってもいけないが、7つの分野に分けたということ自体は、以前の第6次のものに比べて、より具体化したと思うので、そこは評価して良いのではないか。

委 員：分野は、7つでいいと思うが、スポーツイベントをやったほうがいいという町民の声が出ていたが、スポーツは分野としては教育文化に入るという感じか。あるいは健康の延長線上に入るのか。あえて入れていないのか。スポーツがキーワードで出てきたなど思って見ていて、入れなくてもいいが、どうなのかなと思った。

会 長：町では、教育委員会で担当している。社会教育になるのだろうと思うが、それでよろしいか。

事務局：はい。4の教育文化にスポーツは入っているという形で整理しています。

会 長：ここにもスポーツと入っていると具体的でわかりやすいかもしない。

委 員：資料5の3つの丸があるが、この黄色の中の文字が読みにくくてしょうがない。何か直す方法はないか。

事務局：申し訳ございません。色合いの工夫や色を濃くして白抜きするとか、工夫を致します。文言としては社会ということでソサエティーが入っています。

委 員：今のこの7つの分野の説明がされているが、これは行政の方とは結びついていると考えてよろしいか。何課が担当しているとか、前回の資料で目標を立ててやっているので、分類できるのではないかと思ったのだが。

事務局：前回も、施策と担当課はツリーとなって全部繋がっていますが、その下にそのまま各担当課が繋がっているというような状態になっています。

委 員：この目標と、第7次の計画と行政が結びついていると考えて良いですか。

事務局：その通りです。

委 員：今のことに関連してですが、確かにこうすることで、どこの部署が責任を持ってリードしていくのかというのが明確になるということがメリットとしてある一方で、複数の分野にまたがって出てくるものが、具体化すればするほど、たくさん出てくるのではないかと思う。先程の話題にも出たように、スポーツイベントになると、健康とか子育て、あるいは観光産業、イベントの規模等にもよるが、場合によっては都市基盤とかが関わってくる可能性が

ある。そういう時に、庁内でどういった体制を組むのか、つまりどこが責任を持って主導権を持ち、どこが支えるのかというのが出てくると思う。具体的にケースバイケースで考えていくのが基本だとは思うが、基本計画を示す段階までに、典型的ないくつかについて、庁内の体制の例示みたいなものを打ち出せればいいのではと感じた。

委 員：今のは結構重要だと思う。基本的には町長が旗振りをやるのかなとは思うが、実際には誰が旗振りをすると考えてよろしいか。

事務局：大きな区分けは 7 つになっていますが、来年度に入ってから、詳細な内容に関しては、各担当課の方で目標をまとめながらやっていき、来年度の審議会で審議して頂く内容になっています。

委 員：例えば、3 つの課が一緒にやらなくてはいけないとなった場合に、どこが旗振りをやるかというのが、重要だと思う。結構「私じゃない」というのが起きてしまうと大変だと思うので、お聞きしたいと思う。

事務局：まさに分野横断という形で取り組むプロジェクトとして、第 6 次総合計画では重点プロジェクトを定めています。重点テーマとしては「参加」、「支え合い」、「賑わい」という 3 つのテーマを設け、あみ未来プロジェクトという名称で、第 6 次総合計画で位置づけています。これは、それぞれの担当部署が連携して取り組むプロジェクトとして位置づけ、どういったことを実現するかというところを含めて、庁内で整理をしていくことになります。各基本目標は、それぞれの分野ごとに分かれていますが、分野横断的にやるべき取組というのをテーマとして、基本計画の部分でそういういたテーマを設けていければと考えています。

事務局：補足説明いたします。先ほど第 6 次総合計画の中でも連携している課題に取り組んでいたという話がありました。例えば観光という話が出ましたが観光資源の発掘という施策があります。それを実施するのが商工観光課や、以前にあった政策秘書課、道路公園課、予科練平和記念館、生涯学習課、となっています。また、霞ヶ浦をテーマにすると、色々な関係各課が出て来ます。施策ごとに主担当をやったり、副担当をやったりという形で連携して取り組む、ということで基本計画の中で整理していくという形になると思います。

委 員：色々な課題を解決しようとしますと、単独の課では解決できないことがいっぱい出てきています。例えば子育てに関して、母子手帳を受けるところから、すべて教育委員会がまとめてやっているというところもある。今回、この 7 つの分野で具体的に進めていくときに、中心になる課はどこなのか、組織の再編も含めて、それを実際進めていくのに実行しやすいような体制作りを、残りあ

と1年ちょっとの中できちんとやっていかないと、絵に描いた餅になってしまい、実際に走り出すと縦割りの壁が非常に厚くて思うように進まないということもあると思うので、そこも具体的にして頂ければいいかなと思う。

委 員：人口50,000人もあるが、これは10年後にはどのくらい増えているのか。

事務局：資料6の6ページの「将来人口の検討」というページをご覧ください。2033年は、2030年と2035年の間あたりで推計が出ております。オレンジの急激に落ち込んでいるのは、社人研という組織が推定したものとなりまして、現状とはかなり乖離した推定となっています。実態に近いのは、上の青色もしくは緑色の線となり、2033年あたりは人口50,000人を維持しているという推定となっています。これは、まさに基本計画のほうでご議論頂く町の取組によって、変化してくる部分です。社会増、自然増に影響する人口施策をどういう風に考えていくかによって、変化してくる部分もあります。これまでの人口ビジョンからも、50,000人は維持できるのではないかという推定で、現在整理しています。

会 長：この社会保障人口問題研究所の推計は、特に阿見町の実態を反映した予測というわけではなくて、かなり全国的な数値になっておりますので、だいぶ傾向が違っているかと思います。実態に即した予測というのが将来人口の検討では必要になってくると思います。

委 員：さっき行政組織の話をしましたが、他市町村では環境経済部というのがあり、それは環境経済学から来ているそうです。これを見てみると、社会と環境と経済とが、トライアングルになっている。環境経済部というのも、1つの考え方としてあるかなと思う。その点もちょっと考慮して頂ければと思います。

委 員：前文の文言ですが、10年後の夢を入れるのは分かるが、この文言の使い方で、項目ごとに「そのまちでは」というのが、公文書的にはいかがなものか。第6次総合計画の中でも、将来像が出ていて、「そのまち」というのをちょっと使いすぎではないかという懸念がある。かといって代替案は持ち合わせていないけれども、「地域の課題について」とか、そういう表題を文言に入れたらしいのではと思う。

委 員：今ご指摘があった内容はこの文章が、未来の町を想定した内容で書かれているということに気がつくまでに、文章を読み進めていかないとわかりにくいというところだと思う。ぱっと見て「10年後の阿見町に私たちが望む未来」とあると、まずここで混乱するような気がする。「私たちが10年後の阿見町に望む未来はどんな未来でしょうか」とか、「その未来を考えてみましょう」とスト

レートに言った方が良いと思う。今の委員のご指摘は、この中身を直すのではなく、文章の構成を直す方が良いかと思いう。そのためには前文を1つの文章で書くのではなく「未来のまちはこうなっています。それはどんなまちでしょうか」というような、問い合わせがあつて「それはこんなまちですよ」という風に伝えやすく構成しなおすと、「そのまち」という表現に違和感がなくなってくるのではという気がした。

委 員：他には、その前に「10年後のまちの姿、そのまちではどんな姿があるでしょうか」と始めの文章で「そのまち」と入れて示唆してしまえば、イメージを膨らませた「そのまち」ではね、とわかりやすくなるのかなと思う。10年後まちの姿の前に「そのまち」という言葉を使ってないのに「そのまちでは、そのまちでは」とイメージの話をしているので、乖離してしまっているのだと思う。その町はどんな町で、と入れてあれば「そのまちでは、そのまちでは」というので何を指示しているのかというのが明確になるかなと思う。「10年後のそのまちでは」というところが「そのまち」と集約されていることになるので、そこがイコールであるということを明確にした方が、イメージが整いやすいのかなと思う。

会 長：構成を少し工夫して、わかりやすく問い合わせも含めて考えてもらうというのも良いアイデアかと思います。

委 員：細かいところだが、50,000人という人口を実現していく上で、若者が大事だという事だが、その若者というのが出てくるのがかなり最後の方になっている。一方で2段落目には子どもも高齢者も障害のあるなしに関わらずということで出てきていて、この辺りの早い段階で、まちが大事にしようとしている若者を入れられないかなと思う。逆に、子どもと若者と高齢者以外は見ないのか、という話になると思われるが、世代的にどう網羅するかというのは、難しいという感じもするが、もう少し前のほうに出せないかと思う。もう一つは表現の問題で、2回目の「そのまちでは様々な困難から」という所の「様々な困難から」の場所を「守られ」の前に移動してはどうか。「様々な困難から子育てをする」で続けられますとちょっとドキッとしてしまう文章なので「子育てをする保護者と乳幼児が様々な困難から守られ」という風に書いたほうが、安心して読めるかなと思った。同じく表現で、1番最後の行になるが「様々な脅威に強く」とあるが「脅威」という言葉は、かなり強い表現ではないのか。「脅威」というと、非常に差し迫ったもののように、例えば「災害」とか「問題」とか、もう少し柔らかい弱めた言葉にしたほうが良いのではないか。

委 員：「脅威は強い」というのが出ましたが、強いインパクトのある言葉だというのはわかるが、7つの目標の生活環境の中で「災害に

「強いまち」と謳っているので、その文言を持ってきた方が、言葉が柔らかくなるのではないか。

委 員：阿見文化という言葉があるが、自慢とか誇りを持つために重要なことかと思うが、どのような歴史や文化があるのか、具体例があると、説得力が増すような気がした。

また、人口が 50,000 人で市になるという話だが、市になると何が変わるのがあるのか、というのがあるとわかりやすいと思った。

委 員：今ちょうど文化の話が出たが、かなり「阿見文化」という形で踏み込んだ表現がされている。一方で、1枚戻って1ページ目のまちづくりの基本理念には、文化という言葉は入っていないというところにアンバランスを感じた。具体的にどこに文化を入れるかというと、確信を持てないが、スローガンが入りますというところから上から3行目の「地域の魅力を創造発信」というところで、「地域の魅力や文化」という風に文化を入れるか、あるいはその次の行の「未来へ続く新しいステージや文化を」というところで阿見文化という風に入れてもいいかもしれない。何かしらこの辺りで文化というのを入れても良いのではないかなと思う。7つの分野の中にも 50,000 人都市という言葉が 2 回あり、やはり都市になる、ということが非常に強調されていると思う。都市という所の分け目になるとは思わないが、それでもやはり重視されるのは、文化というところではないかと思う。それだけたくさんの人間がただそこで暮らしているわけではなくて、文化を育んでいるんだという、そういう場としての都市なんだというところを入れてはどうか。

委 員：大きな全体の意味合いではないが、「誰一人取り残すことなく」のところが、「誰一人取り残される」ではなく「取り残す」というのは、町が主体でやっている文章だから「取り残す」になるのかなと思った。この文章を普通に町民が読むとしたら、「誰一人取り残される」の方が自然な気がする。取り残すことのない町にする、ということなら「取り残す」で良いと思うが、全体としてのトーンが、誰が主体でどういうことを書いてあるのかというのが明確でないためか、読み進めていくと「取り残す」だと「私は取り残されるのではないか？」と感じてしまうのではないか。違和感がある。やることを表現している文書なので、他意はないが、ざらつき感があるところだなと感じた。

委 員：基本的にバランスは取れているような形で案ができてきていると思っている。それとともに、第6次総合計画の時に比べれば例えばSDGsはもちろんだが、ダイバーシティとかインクルーシブとか、そういうところまで含めて将来像に盛り込まれており、それが直接言葉として使われていなくてもその意味内容が前文や基本理念に反映されているので、基本的な方向性としてはこれで良い

と、個人的には思っている。先ほどから話題になっている阿見文化については、学生さんの意見交換会で私も立ちあつたのですが、学生さんは、普通の日常の生活できれいにゴミの収集やってくれているといった、特に特別なものでなくとも、そういう日常生活が淡々と、きちんとした形で動いていることこそが、大事なんじやないかということを言っていた学生さんもいた。そうだな、と個人的に思った。なかなか映える前文になり難いところがあるが、可能であればそういったところも含めて、前文だけではなくて全体的なこの第7次の総合計画の中の基本方針の中の1つとして、念頭に置いて作っていけばいいかなと思った。

委員：資料の中にずっと50,000人都市という言葉が出ているが、50,000人都市になると阿見町は市になるのか。それを目指しているので50,000人都市がずっと出てきているということでおろしいか。50,000人を超えると市政として動き出すということか。

事務局：ご指摘の通り、市制施行に移行する要件に50,000人がある。50,000人になったから必ずしも市にならなければならないというわけではないが、町長の政策公約では市政にするということを明確に打ち出していますので、50,000人を超えたら阿見町としては市政を目指すということで、50,000人という言葉が入っている。

委員：町から市政になるとどのようになるかは、10年後の中には組み込まれはしないのか。

事務局：10年後のまちの姿というのは50,000人都市ということで市政を踏まえて10年後を目指すとなっておりますので、イメージとしては市になった阿見市です。阿見市になっていることをイメージして、そこからバックキャスティングで施策を整理していくという感じで、10年後のまちの姿は市政になっている姿となります。

委員：このまちというのは市政になった未来ということか。

事務局：今の市政についてですが、市になると色々な権限が町に出てきます。今は県に色々なことをお願いしているが、それが阿見町としてできるようになると思う。行政サービスもより皆様に近づけていくことができます。人口の状況も、50,000人目前です。今、西部地区の方でも開発がどんどん進んでおり、阿見吉原でもそうです。今年中に、もしかしたら50,000人になるかもしれない。ただ、市政の基準となる50,000人は、令和7年の国勢調査の時点では50,000人でなくてはいけないので、そこまではある程度増え続けていかなければならぬということで、目標としています。令和7年の国勢調査で50,000人となると、令和8年に正式な数字が発表になりますので、令和9年くらいが市政施行の期日になる、そこに到達をするということを、今の段階では想定しています。

委 員：先ほどから話として、どうやって縦割りを超えたらしいのかという話があったと思うが、基本目標のところに入れてしまうという方法もあると思う。スローガンというか、基本目標のところに入っていると「なのでこういう風に働きましょう」となるのか、逆に明確化してしまうと実際に動きづらいのであれば、明確化しない方が良いけれども。どうやったら実行しやすいかが大事なので、明確化しましょうということではないです。入っていた方が「こういう目標もあることですからこの課とこの課で組んでくれませんか」という働きかけがしやすいのであるならば入れた方がいいと思う。どちらなのかというのはわからないので、入れましょうという意味ではなくて、連携しやすいなら入れるということで、判断はお任せしたいと思う。

事務局：縦割りというのはマイナスイメージが強いので、連携ということになると思うが、先ほど他の委員からの方からもあったが、総合計画を作りながら、この行政組織も変えていかなければならないと事務局では判断をしています。例えばDXを推進するためにはどういう行政機構を作るべきなのか、とか。そういった事は1つの課がやることではなくて、連携を組みながら、いくつかの政策を、効率的に実施するためにはどういう課を作らなければならないのかというのと合わせて、考えていくべきと思います。ただ、ここにどういう風に入れ込むかというのは連携を中心に、という表現の方がいいのかな、という風には思います。

委 員：動きやすいようにしてもらうのが大事だと思いますので、どちらでもよいと思う。

委 員：先ほど、阿見文化という言葉が出てきた。最初に読んだときにはあまり気にも留めなかつたが、改めて阿見文化という活字4文字の言葉として見たときに、一般町民の肌感覚でいうと「阿見に文化なんてあるの？」という感じを受けます。字面が与える印象でいうと、芸術、アカデミーみたいな感じの文化じゃないことはわかるのですが、阿見文化というと、イスラム文化とかメソポタミア文明みたいな感じで、むしろ逆効果な言葉に聞こえる。そんな文化がどこにあるの、そういう声が聞こえてきそうで、ここはもっとやんわりと「新しい阿見町の文化」のように4字熟語にしないほうがいいのではないかと思う。少しニュアンスを弱めて、色々な伝承されていることも全て含めて「阿見町らしさ」のような、四字熟語は避けたほうがいいのではないか。一般の人から阿見文化って何？という声が聞こえてきそうだと思った。

会 長：君島のひょっとことか阿見文化だなと思います。

委 員：確かに、阿見文化って何なのと言われると、なかなか知られてない部分もある。阿見坂上の前に喜幸会という津軽三味線の会があり、津軽三味線のプロの集団で20名から30名、大勢の演舞にお

いては3年連続日本一です。その中で太鼓を叩ける青年もいるが、彼は世界チャンピオンです。そういう賞を取っている人も実際にいるほど、結構、日本舞踊なども阿見は盛んですし、お花も盛んですし、色々なことやっている方が結構います。集落においても、小池の方には鎌倉以前からの集落もありますし、歴史的に長いものを持っている。そういう文化的なものでは、ある意味、世界に誇れるものが身近にあるということを考えると、これはこれで発信してもらえると納得して頂けるのではないかと思う。

委 員：発信力と関わってくる。あえて打ち出すならカッコ付きでもいいかもしれません。

事務局：良いと思う。

会 長：情報発信というところも含めて対応できるとプラスになると思う。阿見町に3つの大学があるので、大学との連携に関する記述が入っていると協力しやすいかもしれない。

委 員：基本目標の1から7まであるが、いずれにしても柔軟性を持った項目にしていかないといけないと思う。

委 員：確かに柔軟性も大事だが、前回の総合計画だと重点プロジェクトというのがあった。今回は、基本目標のそれぞれに対応するような重点プロジェクトというか、フラッグシッププロジェクトとか、基幹プロジェクトみたいな感じが良いと思う。いわゆる目玉政策。そういうものをそれぞれの目標に立てていく。重点プロジェクトなりフラッグシッププロジェクトなりを立てて、そのプロジェクトに具体的にどの部署がどのような位置づけで関わっていくのか、庁内のパートナーシップのあり方というのを、ちゃんと記載していくことで、行政の縦割り的な役割分担では無い、というところを示していくというのが1つのやり方かなと感じた。SDGsの17番のパートナーシップは、その前のMDGsから入っている。大学のランキングでも、世界ランキングとかでもSDGsがランキングされる時代になってきた。そのランキングの時に1番大事なのが、パートナーシップです。これが必須になっていて、ほかのゴールの評価は大学ごとに得意なところを評価してもらえるが、パートナーシップだけは必須です。つまり1番重視されているということです。やはり組織の中、あるいは外とどういう形でパートナーシップを組んでいるのか、それがどんな社会的なインパクトを生み出しているのか、どういう影響を与えているのかということが、世界的な流れとして重視される時代になってきていると感じる。そういう部分もこの基本目標の中に、目標は目標として持ちながら、それを実現していくためのプロジェクトとして、こういう体制でこのプロジェクトに臨みます、と旗を立ててはどうかと感じた。

	<p>会長：パートナーシップというと、それぞれの基本目標の中に、それに該当する項目が少しずつ散らばって入ってきています。例えば基本目標1に入れればいい、とかそういうわけではなくて、色々な目標に関連してくると思うので、そういう考え方をベースに考えていくというのが必要になってくると思う。</p>
委員：	そうなると思う。さらに先ほどから出ているように、最初からあまり細かく作りこみすぎると柔軟性を失ってしまうので、予測困難な時代に、柔軟性を維持した上で、フラッグシッププロジェクトという形にしてはいかがかと思う。
委員：	ゾーニング案そのものに関して異論があるわけではないが、ゾーンとゾーンの間の関係性、連携については、どこかに説明が記載される予定があるのか。
事務局：	主なゾーンを範囲で示しています。薄緑の自然環境共生ゾーンは、市街化調整区域という都市計画区域のゾーニングになっています。全体的に被るようなところは、おおまかな円の状態で囲つてあるような状況で、それぞれの詳細は都市計画に移っていくような形になります。この総合計画におきましては、大枠のほうの表示で示しているという状況になります。
委員：	町民あるいは将来の市民の方がこの計画等を読んだときに、ゾーンに分けられているというのはわかるが、その間にどんな関係があるのか、ないのかという、言ってみれば町内にいろんな線が引かれていて、ここはそれ専用の場所ですということを示している。自然環境共生ゾーンというのがほぼ市街化調整区域とイコールだということであるならば、1番広いゾーンでもあるが、それがそれぞれのゾーンをどう繋いでいるのかとか、ゾーニングの有機的な繋がりはこうなっています、ということを知らされる方が、市民としても様々な施策に関わった時に参考になるのかなと思った。
会長：	少し書き加えると少し改善できるかなと思う。
委員：	9ページの最後の段落の2行目のところに、連携という言葉があるので、そこを少し具体的に。それぞれの特徴を活かした役割分担のもとで、適切に連携していく、という書き振りがありますので、ここをもう少し具体的に書いてはいいのではないか。

16時25分終了